

循環器病センターの紹介



循環器病センターは心臓血管内科、心臓血管外科、小児科（循環器）の3つの科から構成されています。外来部門では心臓病、不整脈、高血圧、大動脈や静脈など文字通り体の循環を司る臓器を対象として診療しています。また循環器病センターの裏手には心臓カテーテル検査室があり、それぞれの科が協力してカテーテル検査、冠動脈や動脈形成術（ステント治療）や不整脈治療を日夜行っております。そのような中で日本初かつ東アジア初のロボットを用いた冠動脈治療が久留米大学で行われました。このロボットの最大のメリットは術者の被曝がほとんど無くなる

ことと血管の中にステントを留置する際に1ミリメートル単位の位置決めが瞬時に可能であるという点です。

この装置の未来は通信インフラが整えば、離島や医療過疎地区への医療の提供が可能になると考えております。

久留米大学病院循環器病センターでは今後も地域の皆様に安心で安全な、そして最新の治療を提供していきます。

令和元年10月

久留米大学病院 副院長
久留米大学医学部 循環器病センター 教授
久留米大学臨床研究支援センター長

上野 高史

病院執行部体制

病 院 長	八 木 実
病院長特別補佐	志波 直人
副 院 長	鳥村 拓司
	上野 高史
	田中 芳明
	渡邊 浩
	福本 義弘
	高須 修
	上野 知昭

私たちの理念

人と地球にやさしい、^{いのち}生命を慈しむ医療

私たちのめざす医療

1. 患者中心の医療
生命の尊さにもとづき、患者や家族の権利を尊重し、心のかよう医療を行います。
2. 共生の医療
地球環境にやさしい共生の医療をめざします。
3. 高度で安全なチーム医療
安全性を確保し、高度で専門的なチーム医療の確立をめざします。
4. 地域と共に歩む医療
地域医療機関との連携を密にした、継続性のある医療を行います。
5. 優れた医療人の育成
教育機関として高水準の医療技術と思いやりを備えた医療人の育成に努めます。

TOPICS 1

子宮体癌に対するダヴィンチを使用したロボット支援下手術

久留米大学医学部産婦人科学講座

講師 津田 尚武

主任教授 牛嶋 公生

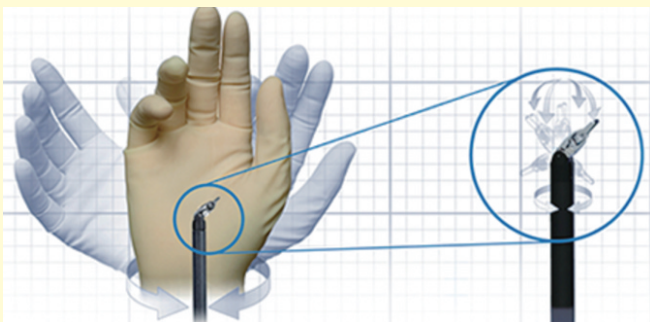
産婦人科領域でのロボット支援下手術は、ステージⅠ期の子宮体癌（類内膜腺癌：高分化型）に対して、ダヴィンチを用いたロボット支援下子宮悪性腫瘍手術が2018年4月より保険適応となりました。

久留米大学産婦人科では2018年11月より早期子宮体癌に対するロボット支援下子宮悪性腫瘍手術の臨床試験を開始し、10例の終了後、2019年7月より保険診療施行施設として九州厚生局より認可されました。

手術支援ロボット（ダヴィンチ）を用いた子宮悪性腫瘍手術は、同じ低侵襲手術である腹腔鏡下での手術と比較して、三次元拡大視野でロボット手術器具の先端が人間よりも優れた手首関節機能を有するため、腔壁の縫合などにおいて、より精密な縫合操作が可能となります。また、開腹手術と比較して、小さい創部であるため術後の創部痛や創部周囲の癒着が原因となる術後腸閉塞などの合併症も軽減し、手術後の社会復帰が早いといった利点があります。この点は、本術式の対象となる女性にとって、大きなメリットがあると思われます。

当科でのロボット支援下での子宮体癌の入院期間に関しては、最短で術後5日目に退院となります。（開腹手術は9日目に退院）

近年、子宮体癌は婦人科女性悪性腫瘍の中で最も症例数が増加傾向にあり、本ロボット支援下子宮悪性腫瘍手術が、筑後地域の対象となる患者様への低侵襲手術の一つの選択肢として提供できればと思っております。



ダヴィンチ鉗子先端の手首関節機能（Intuitive Surgical社資料より）



ダヴィンチを用いた後腹膜リンパ節郭清

TOPICS 2

がんゲノム医療拠点病院への指定

臨床医学の分野において、手術、抗がん剤治療、放射線治療の進歩により「がん」の治療成績は格段に向上し、決して不治の病ではなくなりました。しかしながら、近年日本では「がん」の患者さんが増加し、日本人の2人に1人は「がん」にかかり、3人に1人が「がん」でなくなっており、死因の第一位になっています。一方で、近年の基礎医学研究の進歩も目覚ましく、「がん」自身の正体が徐々に明らかとなり、「がん」は、いまでは細胞の中の遺伝子の異常の積み重なりにより発生することが分かってきました。さらに、多くの「がん」においてどのような遺伝子に異常が起こっているかも明らかになりつつあります。このような成果をもとに、15年ほど前から化学療法の分野において、細胞の中の特定の遺伝子などを標的とする分子標的薬が開発され、多くの「がん」において、実臨床で用いられています。これらの分子標的薬をより有効に用いるために、近年、国は一度に多くの遺伝子異常を検査することができる「遺伝子パネル」を用いて、患者さんの癌組織の遺伝子異常を調べ、遺伝子異常にあった分子標的薬で治療を行うという、「がんゲノム医療」に力を入れ、2019年4月の時点では、がんゲノム医療の中心的役割を担う中核病院11か所と中核病院の指導の下がんゲノム医療をおこなう、連携病院156か所が選定されています。さらに、今年9月には中核病院とほぼ同等の役割を担う、がんゲノム医療拠点病院が全国で34か所選定され、九州では久留米大学を含めて4病院が指定を受けました。

「がんゲノム医療」は、標準的な治療が終了した患者さん、希少がんの患者さん、小児がんで以前に手術などで「がん」の組織を取り出し保存されている患者さんが対象となり、すべての患者さんが受けられるわけではありません。さらに、「遺伝子パネル」検査を行った結果、適した分子標的薬が見つからない場合の多くあることが予想されます。このような問題点はありますが、「がん」の新しい治療であり、治療成績を良くすることが期待されます。「がんゲノム医療」を受けてみたいと思われる患者さんは、通院中の病院の主治医もしくは久留米大学病院までお問い合わせください。



副院長

内科学（消化器内科部門）主任教授

腫瘍センターセンター長

鳥村 拓司

TOPICS 3

遺伝外来の紹介

ゲノム医療の発展に伴い、がんをはじめとする様々な疾患において、ゲノム情報を利用した個別化医療が開始されています。久留米大学病院でも、がんゲノム連携病院に指定されたことを機に、今年度から認定遺伝カウンセラーが赴任し、遺伝外来をリニューアルしました。これまで各科で行っていた、出生前診断、先天性疾患に加え、家族性腫瘍やがんパネル検査の2次的所見に伴う遺伝カウンセリング体制を整備しました。

自分のがんが子供に遺伝しないか不安。高齢妊娠なので出生前診断をしたい。家族に生まれつきの病気があるので心配など、遺伝に関するさまざまな悩みをお持ちの方に、臨床遺伝専門医と認定遺伝カウンセラーが、プライバシーの保たれた部屋で丁寧な遺伝カウンセリングを提供いたします。

地域の皆さまにも気軽にご活用していただけるように今後も努力してまいりますので、ご協力をいただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

令和元年10月

久留米大学病院 遺伝外来

学長直属 講師

認定遺伝カウンセラー

沼田 早苗

遺伝外来 病院本館3階

渡り廊下を
お進みください



久留米大学病院本館3Fに遺伝外来があります。院内には矢印がついた案内の掲示があります。

こちらのお部屋で遺伝カウンセリングを行っています。

